

2024年2月2日
名城大学大学院経済学研究科経済学専攻2年
学籍番号 223321001
石田恋宝

シンママ大阪応援団と関連団体の調査について

はじめに

修士論文を執筆するため、一般社団法人シンママ大阪応援団(以下、シンママ大阪応援団)の活動を観察し、活動に参加している人へ聞き取り調査を行った。また、食材を提供している団体にも聞き取り調査を行ってきた。

調査対象としたシンママ大阪応援団はシングルマザーを支援するために、2015年5月大阪社会保障推進協議会がサイトを立ち上げたことがきっかけとなっている。具体的な活動が大きくなり、2018年3月には一般社団法人格を取得し、その後も継続して支援活動を行っている。

主な活動は日用品や食材をシングルマザーに送付するスペシャルボックス事業、シングルマザーやその子どもたちが宿泊などで利用できる拠点 Zikka の運営を中心にワークサポート事業、高校生と大学生のためのオンラインサポート事業、美味しいスペシャルボックス事業(菓子の詰め合わせを送付)等を行っている。

今回、経済・経営学会研究費を使用しシンママ大阪応援団の活動の観察に加え、活動に携わるボランティア、食材提供団体に対して聞き取り調査を行った。

2023年9月24-25日

当日はスペシャルボックス事業に参加しているボランティアと食材を市民から広く集めるフードドライブを行っている、生活協同組合おおさかバルコープ(以下、おおさかバルコープ)と協力している枚方市循環型社会推進課に聞き取り調査を行った。

スペシャルボックス事業にボランティアとして参加しているAさん

2020年9月からスペシャルボックス事業に参加した。参加するきっかけは、大学の講義でシンママ大阪応援団代表理事の寺内順子氏(以下、寺内氏)からシンママ大阪応援団の話しを聞く中で、母子世帯の半数が貧困だと知り興味を持って参加した。

スペシャルボックス事業を通じて支援側の立場として、古いものや寄付する人が不必要だから寄付するのではなく、受け取った相手がどう感じるのかを考えるようになったと自己分析している。他にもスペシャルボックス事業にはDVなどの被害を受けた当事者も参加しているため、当事者が疲れているのではないかと想像していたが、実際に会ってみると元気で明るく活動しており、想像していたのとは異なっており驚いたようだ。だからこそ、

雰囲気だけでは当事者の状況を理解することは難しく、交流していく中で理解していかなければならないと感じている。

Aさんは長期間関わる中でシンママ大阪応援団は学びの場になっている。シンママ大阪応援団の事務所には生活保護などの資料があるため閲覧したり、相談に来た人に対する配慮として疲れを労い、話しやすい環境を整備するためケーキを渡すといった相手を大切にすることが寺内氏にはある。自分(Aさん)とは異なり、高度なレベルで配慮する思いやりや知識・技術があるため勉強になっていると語っていた。

Aさんは2020年9月から3年間にわたり長期的に活動している。活動の原動力についてAさんは次のように語っている。1度つながりができてしまうと縁が切れなくなり、特に深くつながってしまうと切りにくくなってしまふ。これまでに1回だけ参加して来なくなってしまう人もいるけれども、いつも来ている人がいるから私も参加しようという気持ちになっている。活動を通じて相手を想うことの大切さを考えるようになったと話している。

枚方市循環型社会推進課のBさん

大阪府枚方市では2022年10月から生活協同組合おおさかパルコープ(以下、おおさかパルコープ)と連携してフードドライブ(まだ食べられる食品を行政・民間企業と連携して回収・提供する取り組み)を行うと同時に、枚方市独自で枚方市内にある子ども食堂などに食品を提供している。

枚方市では市内7店舗と枚方市穂谷川資源循環センターに写真1のような食品回収ボックスを設置している。市民から食品回収ボックスに提供された食材は基本的に毎月1日にごみ減量推進課の担当者が各店舗を周り回収している。回収した食材はおおさかパルコープの物流センターに運び、物流センターの仕分けの際に賞味期限が2か月以上の食品のみ、概ね3日後に枚方市に返却される。

返却された食品はメーカー、商品名、賞味期限などをリスト化して子ども食堂を担当している子ども青少年政策課に送り、同課は各子ども食堂にリストを送り、それをもとに必要な食品を各子ども食堂が選択していく。食品の届け先のリストを子ども青少年政策課から返却してもらったら、ごみ減量推進課が各子ども食堂に毎月20日ごろに食品を配送している。

フードドライブを行っている他の自治体とは異なり、市内の店舗の協力を得て回収している点は特徴的である。子ども食堂への提供方法も他とは異なり、リスト化して子ども食堂が選択できるという独自性を生み出している。

写真1 食品回収ボックスと旗「Bさん提供」



2023年9月30日

シンママ大阪応援団が活動を行っている建物で「いのちと暮らしを守るなんでも相談会」が行われたため、活動の観察とシンママ大阪応援団で活動に参加している人への聞き取り調査を行った。

「いのちと暮らしを守るなんでも相談会」では、電話および対面での日常生活の相談に加え、食材提供するフードバンクを同時に行った。相談は医師・歯科・弁護士など幅広い分野で対応している。1階でフードバンクと休息できるカフェを行い、2階で電話・対面相談会を行った。

配布した食材：米2kg、インスタントラーメン、味噌汁、レトルト、お粥、パックご飯2つ、カップ麺、ツナ缶、コーヒー2本、お茶、ポカリスエットの素、石鹼、ボディソープ。

当日の動き

8時30分 スタッフが集まり当日行う内容が説明され活動開始。

9時00分 フードバンクで配布する食材を袋に詰める作業を150袋分行った。

10時00分 アンケートに答えてもらい整理券を配布した。その後、フードバンク開始時間の13時までおにぎりやとん汁、飲み物を飲みながら会場で待機してもらっていた。

13時00分 フードバンク開始。

17時00分 フードバンク終了。

18時00分 2階の相談会場が終了。

その後、食事をしながら交流を行った。

定年退職後に運営スタッフとして活躍する C さん

大阪府出身で仕事の関係で全国各地を異動しており、2020 年に故郷の大阪に戻り定年退職後にシンママ大阪応援団に関わるようになった。

在職中、労働組合の活動をしており、労働組合の会議で社会保障協議会の活動をする寺内氏を知り、その後、シンママ大阪応援団の存在を知った。

サポーターとして関わりを持つ中で現在では運営スタッフとして活動している。C さんが主に担っているのは荷物の整理整頓・食材管理である。届けられた食材の賞味期限をすべてチェックし種類ごとに分別し整頓・搬入を可能なかぎり行っている。スペシャルボックス作業当日は物品を作業場まで移動させたり、事務所に戻して整理して保管する役割を担っている。

C さんはシンママ大阪応援団に関わる中でシングルマザーの生活状況について、理解が深まったという。当初「シングルマザーは離婚して子どもを引き取って生活していると思っていたけど、20 年間 DV を受けていたり、3 人目の子どもが三つ子で 5 人の子どもを抱えて DV から逃げてきたという話を」聞いたそうだ。シンママ大阪応援団の活動は切実な当事者の現状を知る機会になっている。¹

寺内氏にインタビュー

活動終了後に寺内氏にインタビューを行った。

拠点 Zikka は 2018 年 4 月からマンション 3LDK を賃貸して行っている。Zikka は実家のない人、DV の被害を受けた女性や子どもなどが一時的に生活したり、家出をしてきた女性などの一時保護、思春期で家で暴れている子どものショートステイ、お泊り会、ごはん会、お料理教室、着付け教室、相談会、産前産後ケアなど「なんでもできる場所」である。

Zikka を立ち上げたのはシンママ大阪応援団が企画した弘前旅行でのママたち子どもたちの反応がきっかけである。寺内氏はこの企画を通じ、みんなでご飯を食べたり遊ぶ経験が、シングルマザーや子どもたちには特別な経験であることを感じとったという。そこで、空間や料理で「あなたが大事だよ」と伝えられる場所を作るため Zikka の運営が開始された(寺内 2020)。

Zikka に宿泊する人の期間は 1 泊～最長で 4 ヶ月間と様々でシングルマザー、シングルマザーではない女性、子どもなどが訪れている。

シングルマザーの相談では、お金や学費の相談などが多くある。2023 年の夏に特に多かったのが扇風機が欲しいという連絡が 10 人おり、扇風機は Amazon ギフト券を使用して購入し送付している。

¹ 執筆者の修士論文と同様の内容になっている。

2023年10月5日

大阪よどがわ市民生活協同組合(以下、よどがわ市民生協)で聞き取り調査。

よどがわ市民生協では寄贈する食材は10種類とするルールで提供してきた。月に1回、1団体10種類まで各団体が食材を選んで受け取ることができるという仕組みだ。しかし、集まる食材の種類・数には差があり、飲料が1本だけでも1種類になるため、同じ10種類でも数に大きな差が出てしまう。そのため、数が少ない種類の物品は引き取られず、担当職員が各団体に個別で声をかけ引き取ってもらっていた。また、菓子のような人気食品は引き取りの際に提供数を制限し、こども食堂全体に食材が届くように配慮していた。現在では各団体の規模や希望食材を把握して予め団体ごとに食材を仕分け、提供する方法を模索している。²

2023年10月6日

おおさかパルコープの倉庫で食材分類作業の観察。

9時45分 樟葉駅に集合し、タクシーで作業をする倉庫へ向かった。

10時00分 会議室で作業の役割分担とグループ決め、当日行われる内容について説明された。

作業場では役割ごとに荷物を取ってくる人、台車から荷物を降ろす人、賞味期限をチェックする人に分かれていた。

賞味期限のチェックを終えると、常温品の場合は菓子・飲料・シンママという分類がされそれぞれ箱に仕分けていた。その後、各グループごとに分かれ食材を各子ども食堂に分ける作業をした。その際に子ども食堂の利用人数などの情報が記載された紙を参考にしながら仕分けた。その後、重量測定を行い終わったら台車を発送するため移動させた。

次に冷凍品の仕分けを行った。肉・魚・主食といった分類で仕分け、その後は常温品と同じ工程で行った。

最後に冷蔵品は日付ごとに分類していた。賞味期限が常温・冷凍品より短いため、当日(6日)・7日・8日・9日・10日・11日・12日以上の分類であった。その後は常温品と同じ工程で行った。当日のものについては作業終了後に発送しその日に届けられる。

終了後、おおさかパルコープの方が準備した食事をとり駅まで送ってもらった。

2023年10月10日

スペシャルボックス事業を観察した。

参加者 :11人

梱包した食材、米 5kg、レトルト、里芋、パックご飯、菓子、カップ麺、菓子パン、石鹸、ボディソープなど。

² 執筆者の修士論文と同様の内容になっている。

当日の動き

10時00分 段ボール組み立てが全て完成。

12時30分 梱包作業が終了し昼食をとる。

14時00分 あいちフードバンクからフードボックスが届いたため、中の食材をそれぞれ分別した。

今回梱包した物品の中にはあいちフードバンクからパンとクッキーが届いたためそれを梱包した。また、10月はハロウィンということもあり、ハロウィンのパッケージの菓子を梱包した。

写真2 スペシャルボックスの中身の一例



午後

あいちフードバンクからフードボックスが届いたためその分別作業を行った。どの箱にも同一の食材が入っており、その箱から食材を取り出し別の箱に移し替えて事務所で保管した。

2023年11月14日火曜日

スペシャルボックス事業を観察した。

参加者：12人

梱包した物：米、カップラーメン、ジュース、レトルト、菓子、クッキー、インスタントラーメン、パン、みかん、りんご、スパム、ビール、チューハイ、靴、フライパン。

活動内容

あいちフードバンクから食材が届いたため仕分け作業を行った。

今回はいつも参加しているメンバーだったため作業はスムーズに行われた。しかし、ダンボールを小さくカットする作業に時間がかかり、13時30分に終了するといった通常より1時間30分遅くなった。

午後から行ったあいちフードバンクから届いた食材の仕分け作業では、100個のダンボールを各食材ごとに箱にまとめる作業を行った。

今回のできごと

今月は野菜の代わりにみかんとりんごを入れており、それはシンママ大阪応援団が準備した。サポーター通信やSNSでみかんやりんごを入れたいと投稿したところ、りんごがサポーターから届いたようだ。

寺内氏へのインタビュー

活動終了後に寺内氏にインタビューを行った。

季節感のある食材をスペシャルボックスに入れる理由について、本人たちにも季節感を感じてほしい。困窮しているがゆえに季節の商品を購入することができないことに対応している。

シングルマザーがスペシャルボックス事業に参加する理由について、シングルマザー自身が楽しいこと、日曜日のスペシャルボックス事業はシンママ大阪応援団旅行のメンバーでもあり、顔を知っているため他のシングルマザーを想像しながらスペシャルボックス事業を行っている。そのため、あの人が好きなものだからと物品を取り置いたり、私のために取り置いてくれた入れてくれたと感じることができるから。また、シングルマザー同士の交流もあるため自分の悩みを打ち明けられる環境でもある。あなたが大切だということを特に伝えられるからである。多くのシンママ(シングルマザー)は子ども中心の生活をしているため、自分のために何かをしてもらったという経験が少ない。そのため寺内氏は紅茶やシュークリーム・ケーキなどでもてなすことであなたのために用意した、あなたのために紅茶を入れたという経験がシングルマザーにとっては重要であると語っている。

アルコールを入れる理由について、シングルマザーだってアルコールを飲むからその要望に応えている。

サポーターから物品を送りたいというメッセージを受けると、まずは物品の写真を送ってもらい必要としている当事者にその写真を見せ、欲しいと言った人に送っている。シングルマザーが必要としているかどうか、事前に写真で見えて判断して対応している。

スペシャルボックスに封入する野菜は毎月200個7万円分購入している。農家から直接野菜を購入する理由について、現在購入しているのは若い農家で応援する気持ちも込め直接野菜を購入している。

寺内氏はスペシャルボックス事業は支援の入り口と位置づけている。他のフードボック

ス団体では子どもが18歳以上になったり、3年間経過したら終了になるが、シンママ大阪応援はそうではない。スペシャルボックス事業でつながり他の必要な支援へつなげている。年に数件しかスペシャルボックスを卒業しないが、子どもが大きくなったり時間が経過したらシングルマザーの状況が回復するわけではないため、受け取ることができる期限は設けていない。

サポーターから物品を送ってもらう時の注意点について寺内氏はゴミみたいなものを送らないでとサポーター通信に強調している。その理由について、みんなにとってスペシャルと思えるものを送るには嬉しいもの・綺麗なもの・美味しいものを送る必要がある。そうすることで、あなたを大切にしているという思いを伝え、私は生きていて良いと感じてもらえることができる。汚いものを送るというのはその人を否定することを意味しており、ゴミみたいなものは必要ないと寺内氏は伝えている。スペシャルボックスで1ヶ月間生活することはできないが、みんなに大切にされているという感情を与え、その人の心を変えることがスペシャルボックスの意味であると語っていた。

まとめ

シンママ大阪応援団で行われている活動に参加しているボランティアなど多くの人の話を聞く中でシングルマザーへの理解や考え方の深まりを感じた。当事者であるシングルマザーと関わることは当事者ではない人に対して理解を促し、今後の社会を築くことにもつながるのではないかと感じた。

食材を提供している団体においても、事業を変化させながら最適なものにしていく動きがみられた。シンママ大阪応援団の活動を通じて、シングルマザーの気持ちに配慮した活動・スペシャルボックス事業の物品についても配慮がされていた。

謝辞

今回の調査にあたり、シンママ大阪応援団様、枚方市循環型社会推進課様、大阪よどがわ市民生活協同組合様、生活協同組合おおさかパルコープ様、多忙な中、調査に承諾し聞き取り調査、文章の校正をしていただき深く感謝申し上げます。また、スペシャルボックス事業に参加しているボランティアの皆様にも活動の参加について聞き取り調査に応じていただき感謝申し上げます。

このたびは名城大学経済・経営学会様には多くの支援をしていただき、修士論文を無事執筆することができました。感謝申し上げます。

参考文献

寺内順子(2020)『「大丈夫？」より「ごはん食べよう！」言葉はなくても伝わるものがある』
日本機関紙出版センター